

シンポジウムの開催にあたって

国土舘大学イラク古代文化研究所教授
西浦 忠輝

本シンポジウムのテーマは「文化遺産を護る」ということです。この背景には、文化遺産の劣化・崩壊・毀損があり、戦時・戦後復興の混乱のなかで文化遺産をどう護っていくかを考えるのが本シンポジウムの趣旨です。

文化遺産を保護するのはわれわれの意思

さまざまな専門の先生方から具体的なお話がありますが、基本的な考え方を私なりに整理すると次のようになります。まず、「なぜ文化遺産を保護するのか」という根源的、かつ単純な質問があります。これに対する答えは、きわめて単純明快です。それは、多くの人々が文化遺産を保護したいと思っているからです。私たちが生きていくうえで絶対に護らなくてはならないものがたくさんあります。たとえば、食料や資源、地球環境などです。これらを護らないと人類は滅びます。しかし、文化遺産を護らなくても、私たちは生きていけます。文化遺産は、私たちの意思で護っているのであって、やむを得ずやっているわけではないのです。

文化遺産は人類共通の財産

文化遺産は人類の文化活動を具体的に示すものであり、人類の歴史を物語る証です。ですから、文化遺産は皆が一致して護り、活用していくべき人類共通の財産といえます。もちろん、文化遺産が誰に帰属するか、それをどこが管理するのかというような現実的な問題はありますが、本質的に人類共通の財産であると考えべきです。過去に多くの人間が生きてきましたし、未来に生き続けます。ですから、今を生きる私たちが今残されている文化遺産を護り、過去から未来へと後世の人々に伝えていくことは義務といえることができます(図1)。

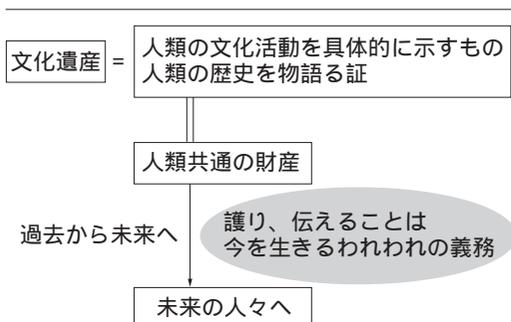


図1 文化遺産は人類共通の財産

文化遺産は常に破壊や消滅の危機にあります。その要因としていろいろなものがありますが、もっとも大きな要因は自然劣化です。あらゆるものは自然に劣化し、消滅していきます。そのため、文化遺産を護るためには努力が必要です。第2は、地震、津波、洪水などの自然災害です。自然災害

による劣化も自然劣化のひとつです。第3は、人為的な要因です。本シンポジウムではとりあげていませんが、開発にともなう文化遺産が破壊されることがあります。多くの場合、文化遺産と宗教は深い関係にありますので、宗教的な理由で壊されたり改変されることもあります。また、不当経済行為、すなわち売買するために盗まれたり、ほかの目的に利用するために改変されることなどがあります。

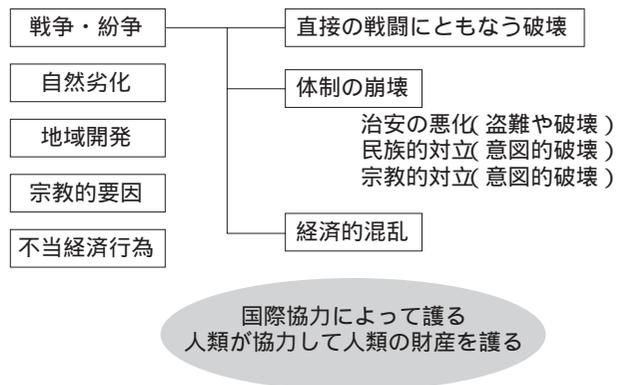


図2 文化遺産の破壊や消滅

戦争や地域紛争はその大きな原因のひとつとなっています。わが国においても、中世以前に、社寺を中心に実に多くの貴重な文化遺産が、戦いのなかで焼失しました。直接の戦闘によって破壊されることももちろんありますが、それによって引き起こされる体制の崩壊や治安の悪化、経済の混乱などによるものが少なくありません。これは現に今、イラクやアフガニスタンで起こっている問題です。体制が崩れることによって民族意識が高まり、民族的対立が激しくなり、他民族のひとつの象徴である文化遺産を意図的に破壊することが、旧ユーゴスラビアなどで現実になりました。また、体制の崩壊にともなう宗教的対立も先鋭化することが、旧ユーゴスラビアでもイラク、アフガニスタンでも起こっています。そして、経済的混乱が起こって不当経済行為や盗難が起こります。目的はあくまでお金です。このような状況下にある文化遺産を人類が協力して護ることは、世界の人々の財産を世界の人々の力で護り、活用していくことなのです。それをどう具体化していくのが、本日のテーマです(図2)。

文化遺産はそれぞれが唯一のもの

文化遺産というものは、それぞれが唯一であって、一度失われたら二度とつくり直すことはできません。今、保護しなければ失われてしまうおそれがあるということが非常に重要な点です。もちろん、復元はあります。復元にも意味はありますが、オリジナルのものには力があります。復元したものには力がありません。

私のきわめて個人的な経験ですが、ここでひとつの例をあげさせていただきます。オランダの首都アムステルダムに『アンネの日記』を書いたアンネ・フランクが潜んでいた民家が、今も残されています。もう20年ほど前になりますが、そこを訪れました。それは、何の変哲もない普通の民家で、それ自体に文化的価値はありません。似たような家がたくさんありますし、貴重な調度品があるわけでもないのですが、「ここであの事件が起きたのだ」という異常な迫力を感じました。それが復元された建物であったなら、私はそれほどの迫力を感じなかったと思います。

美術・工芸品の場合も、本物だと思っていたものが偽物、コピーだといわれたとき、人間

の気持ちはすごく冷めます。なぜでしょうか？それがオリジナルの力というものなのでしょう(図3)

戦後復興の厳しい状況下で、社会的インフラが不足し、食べるものも十分でない現地の住民にとっては、今の生活を少しでもよくすることが最優先で、文化遺産の保護よりも生活の糧になるものがほしいと思うのは当然でしょう。地域の住民たちは、文化遺産の保護には手が回りません。だからこそ、国の外にいる私たちが手を差し伸べる必要があるのです。

身の安全の確保と社会基盤の復興に何年かかるかわかりませんが、10年、20年、50年...の後、生活の問題がある程度解決して余裕が生まれてふと気づいたとき、「あのとき外国の協力で保護されたおかげで文化遺産が残ってよかった。われわれではとても手が回らないところをよくやってくれた」と、必ずやその地域の人々やその国の国民が思ってくれると固く信じています。また、文化遺産が残されることは、人類全体にとっての利益なのです(図4)。

戦後復興に文化遺産を活かす

文化遺産を戦後復興のなかで保護していく場合、より積極的な考え方が議論されています。戦後復興に文化遺産を活かすという考え方です。文化遺産がかけがえのない人類の財産であるということは、きわめて価値の高い財産であるということの意味しています。この文化遺産を戦後復興のための貴重な資源ととらえ、復興への原動力とすることは重要な考え方ではないでしょうか。

文化遺産にはそれを取り巻く民族、国家のアイデンティティーとしての象徴的な力があります。たとえば、日本人にとっての法隆寺や東大寺であり、カンボジアの人たちにとってのアンコール・ワットなどです。そのような文化遺産を護るということは、精神文化の復興、

一度失われたら二度とつくり直すことはできない

オリジナル → 「力」がある

復元したもの → 「力」がない

今、保護しなければ失われてしまう
先送りできない

図3 文化遺産はそれぞれが唯一のもの

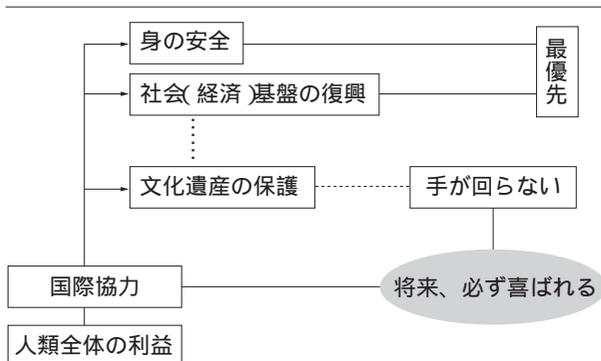


図4 厳しい状況下の地域住民と文化遺産保護国際協力

すなわち民族、国家の誇りを取り戻すことであり、ひいてはその国の復興への大きな力となります。この点で、文化遺産のはたす役割はたいへん大きなものがあります。

経済の面でも大きな力をもっています。観光事業を例にあげて考えてみると、文化遺産としての価値が高ければ高いほど、観光資源としての価値も高くなります。もちろん、過度の観光化によって文

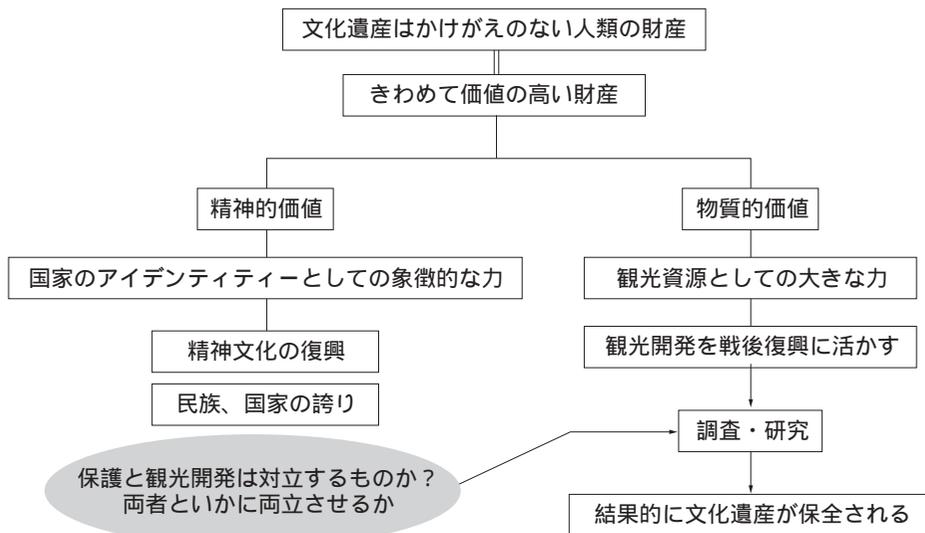


図5 戦後復興に文化遺産を活かす

文化遺産が破壊されることにより価値が低下するなどの悪影響も考えられます。しかし、悪影響を最小限に抑え、適正に活用するのであれば、文化遺産を活かした観光開発は、きわめて大きな経済復興のための資源となります。戦後復興の資源として文化遺産を積極的に活用し、その結果、文化遺産が保全されることになるという考え方は、現実的で積極的な考え方といえます。したがって、保護と観光開発を両立させるための方策を考える調査研究がきわめて重要になります。調査研究により有効な方法を見つけだすことができれば、結果として文化遺産の保全につながります(図5)。

文化遺産への関心は異文化理解への第一歩

文化遺産はある時代における、ある民族の人間活動の具体的な証ですから、文化遺産に興味をもつことは、異文化理解へのきわめて有効な第一歩といえることができます。異文化の理解なしに真の世界平和は実現不可能ですから、文化遺産のはたす役割はきわめて大きいといえます。ですから、今を生きる私たちにとって、文化遺産を護ることは、たいへん重要な活動であるわけです(図6)。

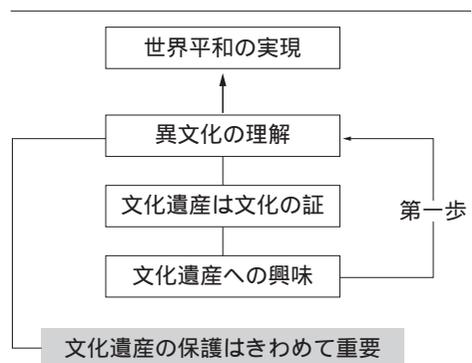


図6 文化遺産と異文化理解